今週の
倫理

2023.5.27～6.2

5月のテーマ ｜ 食は命の恵み

1335号

命の根であるお米を感謝していただこう

「そろた 出そろた さなえが そろた」の歌い出しで始まる「田植」。昭和十七年に発表された文部省唱歌です。今の時期、米づくりをする農家では田植えが始まり、農繁期を迎えます。

「米」という漢字を分解すると、「八」「十」「八」の三つで成り立っています。「お米を作るまでに八十八の手間が掛かる」とも言われ、相当な労力を要します。米づくりは、苗づくり、土づくり、田植え、管理、収穫など、一年を通して行なわれます。

苗づくりは、良い種籾（種になるお米）を選別する「塩水選」を行ない、消毒・乾燥・浸種（水分を吸わせる）等を経て、発芽した種を苗代に撒きます。それが成長して苗となります。

平行して土づくりが行なわれます。田んぼを耕す「田起こし」、水田の水が外に漏れないようにする「畔塗り」、基肥で必要な栄養を加える「田すき」、そして水を入れ田んぼをならす「代かき」等があります。

代かきが終わると、いよいよ田植えです。昔は家族総出で、一本ずつ手作業で苗を植えていきました。この時に無病息災と豊作を願い、田の神様に敬意をもって歌が歌われたのでした。現在では、機械化が進み効率的に行なわれており、五穀豊穣を願いながら田植えをします。

生育期には、雑草を除草したり、病害虫を防いだりする管理が大切です。また、状況に応じて田んぼに水を入れたり引いたりして、水の調整も行ないます。

最後に、成長した稲を収穫し、脱穀、乾燥、籾摺り、精米されて私たちのもと（家庭）に届くのです。

『万人幸福の栞』には、次のように記されています（九十一頁）。

世に、「恩を忘るな」ということがやかましく言われるのは、本を忘れるなという意味である。食物も、衣服も、一本のマッチも、わが力でできたのではない。大衆の重畳堆積幾百千乗の恩の中に生きているのが私である。このことを思うと、世のために尽さずにはおられぬ、人のために働かずにはおられない。

筆者は幼少時代、お茶碗に一粒でもお米が残っていると、祖母から厳しく叱られた思い出があります。「お百姓さんが一所懸命作ってくれたものを粗末にするな」と叱責されたのです。

お米が出来るまでの過程には、多くの人の働きがあり、無数の手間が掛かります。米づくりには、農家の人たちの「良いお米に育ってほしい、消費者に喜んでほしい」との願いが込められています。

米は稲、「命の根」とも言われます。私たちの生命を繋ぎ、糧となる食べ物です。そして、それを作ってくれる人たちがいます。今、目の前にある食べ物は、「決して当たり前ではなく、ありがたいもの」と気づきが転じていくと、「いただきます」「ごちそうさまでした」の挨拶にも、心が籠ってくるはずです。今日も感謝の気持ちをもって、食事をいただきたいものです。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局